

序 章 脱ヒューマニズムの社会思想

1

はじめに (1) / 近代思想における「ヒューマニズム」(2) / 「労働する人間」から「実践する主体」へ (4) / 「人間」像の揺らぎ (6) / ポストモダン的な「人間」(8) / フェミニズムの脱「人間≡男性」化の戦略 (10)

第1章 レーニン ▼社会主義革命の理路と実践

12

革命家レーニンの形成とロシアの革命運動 (13) / マルクス主義の受容 (15) / 独自の革命理論へー「何をなすべきか？」の世界 (18) / 雌伏の時から第一次大戦へ (21) / ボリシェヴィキ革命 (24)

第2章 ルカーチ ▼階級意識の理論

28

初期ルカーチの三部作とは何か (28) / 『魂と形式』における「エッセイの本質と形式」(29) / 故郷喪失の表現形式としての『小説の理論』(32) / 『魂と形式』と『小説の理論』における生と形式 (34) / 『小説の理論』から『歴史と階級意識』へ (36) / ハンガリー評議会共和国とルカーチ (39)

第3章 ブロツホ ▼希望とユートピア 41

略歴と主要著作(41) / ユートピアとブロツホの方法論(44) / 「新事象」と「希望」(47) / 「希望」と歴史—マルクス主義とキリスト教(50)

第4章 ポランニー ▼市場をめぐる心性史 55

はじめに(55) / 経済と社会(56) / ユートピアとしての市場社会(59) / 文明の否定としてのファシズム(62) / 文明の保守としての社会主義(65)

第5章 グラムシ ▼ヘゲモニーと陣地戦 69

はじめに(69) / ロシア革命論と工場評議会運動論(70) / 「南部問題」草稿(一九二六年)における階級同盟、ヘゲモニー、知識人(73) / 市民社会・機動戦／陣地戦・有機的知識人—「獄中ノート」の思想(二)(74) / 政治社会の市民社会への再吸収・生政治—「獄中ノート」の思想(二)(79) / おわりに(80)

第6章 ベンヤミン ▼歴史と廃墟の弁証法 82

神話的な力の呪縛(82) / アレゴリーの志向によつて見出される世界(86) / 複製技術時代の到来(90) / 史的唯物論者の使命(94)

第7章 アドルノ ▼啓蒙理性への懐疑と「非同一的なもの」の救出 99

アドルノとフランクフルト学派(99) / 哲学のアクチュアリティと自然史の理念(101) / 怪物化した啓蒙理性との対峙(103) / 交換原理の支配と近代文明の野蛮

(107) / 「非真理としての全体」と否定弁証法 (110)

第8章

サルトル ▼脱本質化する「ヒューマニズム」

113

「知識人」という役割 (113) / 世界と意識、そして〈状況〉の哲学 (114) / 「われわれの問題」としての人種差別と植民地問題 (118) / 疎外から連帯へ―『弁証法的理性批判』の思想 (122) / おわりに (126)

第9章

フーコー ▼権力と知

128

フーコーの思想 (128) / 人間科学の誕生と「人間の終焉」 (129) / 権力 / 知の系譜学 (133) / 統治性 (136) / 自己と倫理 (139)

第10章

ボードリヤール ▼記号的な人間

142

はじめに (142) / 記号の消費 (144) / 消費社会の神話 (146) / シミュレーションとハイパーリアリティ (149) / 現実性の回帰をめぐる (153)

第11章

ネグリ ▼ポストフォーダイズム時代における生政治的労働の可能性

157

闘争の思想家ネグリ (157) / 労働としての人間 (158) / 〈帝国〉は何ではないか (161) / マルチチュードとは何か (164) / 自由で平等な社会へ (167)

第12章

スピヴァク ▼サバルタンの政治

170

イントロ (170) / 反人間主義とフェミニズム、植民地主義 (171) / サバルタンの声

(174) / 惑星的思想 (181) / 最後に (183)

第13章

ム フ ▼ アゴニズムの民主主義理論 185

はじめに—どのような民主主義か? (185) / 『民主主義の革命』とラディカル・デモクラシー—政治とはヘゲモニー闘争である (186) / 熟議民主主義の興隆—排除なきコンセンサスは可能か? (189) / 熟議の政治に抗して—多元主義と情念の擁護 (190) / 闘技的な民主主義に向けて—政治的なものとしての敵対性 (192) / おわりに (196)

第14章

シンガー ▼ 種差を超える倫理 198

はじめに (198) / 功利主義 (200) / 動物の道徳的地位 (202) / 生命倫理 (204) / 人類の中の平等 (207) / おわりに (210)

第15章

マツキノン ▼ 支配と従属の理論 212

はじめに (212) / セクシユアル・ハラスメント (214) / ポルノグラフィ (218) / マツキノンへの批判とこれから (222)

第16章

コーネル ▼ 「性に関わる存在」の自己再想像 226

はじめに (226) / イマジナリーな領域 (227) / 限界の哲学 (232) / 倫理的フェミニズム (234) / おわりに (237)

第17章

バトラー

▼フェミニズムとジェンダー概念の革新を目指して

239

はじめに (239) / フェミニズムに潜む異性愛規範と性別二元制への徹底的な批判 (241) / 「普遍性」への問い (244) / 「九・一一」のあとで (246) / 暴力のただなかで倫理の可能性を探求すること (247) / 人間主義的フェミニズムとの岐路 (248) / おわりに (251)

あとがき
索引